



井上靖集

日本文学全集 60



日本文学全集 60 井上靖集

昭和四十五年十一月一日発行

著者 井上靖

発行者 竹之内静雄

発行者 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社

本文印刷 多田印刷株式会社

製本 株式会社鈴木製本所

井上靖集 目次

淀どの日記

五

天平の薨

二六

楼蘭

三九

獺銃

三七

闘牛

三九

ある偽作家の生涯

四七

姨捨

四六

満月

四九

年譜

四四

人と文学

河盛好藏 五三

口
繪
写
真
撮
影

道
正
太
郎

井上靖集

天平の藍瓦

一章

井上靖

朝廷で第九次遣唐使發遣のことが議せられ
たのは聖武天皇の天平四年で、その年の八月
十七日に、從四位^上多治比広成が大使に、從五
位下中^臣名代が副使に任命され、そのほかに

淀どの日記

一章

信長が朝倉義景を殲して越前一国を平定し、その戦捷の余勢を駆って、浅井長政を江北の小谷城に困んだのは天正元年八月二十六日であった。小谷城は全く孤立していた。永年の提携者である朝倉氏が亡びてしまった今、長政には一人の救援者もなかった。信長のために足利義昭は追われ、叡山は焼かれ、本願寺一派だけが長政の同盟者として僅かに残っていたが、すでに赴援する余力は持っていなかった。信長は虎御前山の陣地から直ぐ北に見えている小谷城を眺めて、それが一廻り小さくなっていることに驚いた。小谷はこんな小さい城であったかと思つた。長い間自分の本拠である岐阜と京都の間にあつて、事毎に邪魔立てして来た浅井一族が、いま孤立無援のままに、この小さい城に押し込められて身動きできないでいるのを、信長は猫が鼠を射撃めているような氣持でじつと見据えていた。

虎御前山から見ると、城は小谷山の雑木の斜面を背景に

して、京極丸、二の丸、本丸と間の抜けた配置で散らばっていた。そして、本丸の櫓の一部だけが落陽に赤く染まり、背景の雑木は風で立ち騒いでいたが、すべては、信長の眼にはひどくひそやかなものに見えた。西方の琵琶湖から吹いて来る風は冷たかったが、信長は季節の感じを全く受けつけていなかった。朝倉義景の首級を挙げたように、長政と、彼の父久政の首級を挙げるまでは、秋風を身に感ずる余裕はなかった。僅か一月足らずで潰走する義景を追つて越前にはいり、いっきに彼を屠つた興奮が今も面から消えず、それが彼にぎらぎらした小さい眼で小谷城を見詰めさせていた。彼は朝倉の首に長政父子の首を添えて、それを薄濃にして、なんとかして正月まで保たせ、それを肴にして、新年の祝賀に出仕する武将たちと酒を飲もうと思つた。

木下藤吉郎の手に依つて久政の掬る京極曲輪と、長政の居る本丸との間が遮断されたのは翌二十七日であった。小谷城の外構えを指揮していた三田村左衛門尉と小野木佐渡守の二人が降伏したため、容易にそこへ部隊を入れることができたのである。藤吉郎の弟の木下小市郎と竹中半兵衛の二人が兵を率いて城内へはいつた。

その夜、信長は本陣に引き出された三田村、小野木の二人を見ると、

「鏑際の降伏見苦し」

と、ただそれだけ言った。そして藤吉郎に命じて直ちにその二人の降將の首を刎ねさせた。

二十八日も攻撃は続けられ、この日京極曲輪は落ちた。城内では久政が七十一歳を一期として自刃し、介錯には能師の鶴松太夫が当り、彼もまた久政のあとを追って一段下がった縁側で腹を切った。千田采女正、井口越前守、西村丹左衛門等の武將たちは、尽く乱戦の中に討死した。残すは長政の抛る本丸だけとなった。

その夜、藤吉郎は、長政に降伏を勧める使者を送ってはどうかと信長に言上した。

「城内の將士も斯くなる上は死物狂いで最後の戦をしかけることは必定、徒らに死人を出すより、長政に降伏を促して、勞せずして城を取った方が得策かと存じます。それに小谷の御方も——」

藤吉郎は最後の言葉で信長の心中を窺うようにして言った。信長は暫く考えている風だったが、

「恐らく備前（長政）は承知すまいが、使者を送ってみるもよからう」

と、気難しい顔で言った。この時、信長は改めて十年前長政の許に嫁がせた妹が、落城寸前の小谷城の本丸の中に居ることを思った。今までも妹のことは考えないでもなかったが、併し、妹を長政の許に送ってから、それをいつか再び取り返すことがあろうと思ったことはなかった。先方に送った以上もう自分の妹ではなかった。

こうした同じ運命を辿るかも知れない女性は長政の室お市の方ばかりではなかった。現に信長は自分の娘の徳姫を家康の嫡子である岡崎三郎信康の許に嫁がせてあったし、姫は甲斐の勝頼のもとに室として送ってあった。信長は血を分けた兄弟であろうと、わが子であろうと、そんなことには頓着なく、凡そ役に立つものは何でも役立てていた。そうしなければ、この食うか食われるかの戦国の時代に武人として生きて行くことはできなかったのである。

信長が妹市を江北の浅井長政に嫁がせたのは永禄七年、彼女が十八歳の時であった。現在小谷の方とか、お市の方と称ばれているのはこの女性である。信長にとっては、妹を長政のもとに送った時代が最も苦しい時期であった。桶狭間に今川義元を殲してからまだ四年程しかたつていず、斎藤龍興と闘って美濃を取り、その居城稲葉城を岐阜城と改称、漸く西上の拠点を一歩前進せしめた許りの時であった。

併しこの政略結婚のお蔭で、永禄七年から十二年までは浅井氏と事なきを得、ために西上の道を確保して京へ入ることができたのであった。浅井との提携の破れたのは元龜元年の春である。妹と長政との婚姻は、それまでに彼のためにその役割を充分果たしたと言える。

信長は藤吉郎の索るような眼眸を見返しながら、長政の室を救い出すことができるなら、救い出していっこうに差つかえない立場にある自分を思った。美貌な妹の繊弱な

体軀が、彼女を嫁がせて初めてこの時信長の臉上に浮かんで来た。

その夜不破河内守が使者として選ばれて、長政宛の書面を携行した。

——合戦の習已むことを得ずして是までに及ぶこと武門の常、弓箭の意地是非なきことに候。義景勅命に背き天誅を蒙り、すでに亡び候。備州（長政）のことは我がもとより懇望して縁者となりしほどの義なり。唯今かくの如くに及ぶと雖も聊か以て疎意存ぜず候。願はくば居城退出ありて存命させ給ふべし。料地のこと追つて沙汰いたし参らすべく候。左候はば浅井の家名も断絶せず信長の本意もまた大慶これに過ぎず候

書面には斯う認められてあった。

不破河内守は半刻ほどして帰って来て、長政に全く降伏開城の意志のないこと、それから彼が室小谷の方と三人の姫を陣に送り入れ、扶助して貰いたい意嚮を持っていることを伝えた。その夜のうちに、不破河内守がもう一度使者に立った。勿論小谷の方と三女のことを承知する旨を先方へ伝えるためであった。

翌二十九日早晩四挺の輿と、それに従う二十数人の侍女が藤掛三河守永勝を輿添として送り届けられて来た。藤掛三河守は十年前小谷の方の婚礼の時付き添って行った織田方の武士であった。信長は陣所で城内から輿が来たことを聞くと、それに対して眉一つ動かさず、一言も発しなかつた。

た。近侍の者が、重ねてその措置を尋ねると、陣所の横手の雑木の疎林の中に輿を置くように命じた。四挺の輿は丘陵の斜面の坐りのいい場所を選んで、僅かの間隔を保って並んで置かれ、大勢の侍女たちはその周囲に集まって、地面に坐った。

恰も輿の到着が開戦の合図であるごとく本丸の攻撃は始められた。木下藤吉郎、丹羽長秀、柴田勝家の攻撃軍と、死物狂いの籠城軍との間に終日激戦が繰り返されたが、城は落ちなかつた。寄手は塀の際に取りついたまま、丸の内には一人もはいらず夜を迎えた。その夜半雨を混じえた大風が吹いた。京都地方でも何百軒かの倒壊家屋が出たほどの烈風であった。

翌九月一日の朝、風は衰えたが、新戦場の丘上から見ると、琵琶湖の湖面は波立ち騒いでいた。戦闘は前日に勝る烈しさで再開された。籠城軍もこの日を最期の合戦として、午前九時には本丸の城門を押し開いて、長政を先頭に全員二百が打って出た。

木下・柴田の軍勢の一部は、長政の働きに構わずあとへ廻り、丸の中を取り切ったので、長政は丸の中へはいることができず、城脇の赤尾美作守の屋形に駆入った。長政は味方が残り僅か数十騎になっているのを見ると、己が命数の尽きたことを知り、館に火をかけ、防ぎ矢を射させておいて、その間に自刃した。歳二十九であった。この合戦で、長く浅井家の柱石として知られていた赤尾美作守と、浅井

石見守の二人は、老武者のこととて不覚にも生捕られたが、他の者は尽くあるいは斬死し、あるいは自刃して果てた。

火焰の噴き出している本丸へ攻撃軍の各部隊が入り、城内の掃蕩を終ったのは午後二時であった。守護京極氏を亡ぼし、それに替って江北に長く威を振った豪族浅井氏はここに全く亡んだのである。前日から雑木林の中へ置かれ放しにされた輿は、その間置物のように動かなかった。戦場を吹きまくった風は、この雑木林の中にも合戦の雄叫びを高く低く伝えていたが、それらがやがて次第に遠のいて全く鎮まると、女たちは空の半分が異様な暗さで覆われるのを見た。三時、輿は何十人かの武士に護られて、戦火のおさまった虎御前山を降り、昼とも夜ともつかぬ異様な暗さの漂う中を湖に沿って南へ向かった。

その夜、虎御前山の陣で、信長は長政の首級を検したあとで、捕虜となった浅井石見守と赤尾美作守を引き出した。篝火の火照りで二人の老武者の顔は赤く醜く見えた。信長は二人に向かつて、

「おぬしらが所存として長政に逆心させ、長年余に骨を折らせた。憎んでも余りある奴ばらが！」
と呶鳴った。それを聞くと、浅井石見守は縛られたまま顔をあげて、

「長政公はおぬしのように表裏ある大将ではなかった。そのため今日の御最期となった。」
と烈しい口調で言い返した。

「生捕られし程の武士で、よく表裏を存じおるな」

信長は槍の石突で石見守の白髪を三つ小突いた。

「縛した者を打って腹癒ゆるか」

信長はそれには取りあわず、こんどは美作守に向かつて言った。

「おぬしは若い時から鬼神のように聞えた武士の管だったか」

美作守の方は石見守とは違って素直だった。

「磔したと見えまする」

すると信長は、同じく生捕られている息子の新兵衛をそこへ引き出し、

「おぬしは磔されていて駄目だが、忤の新兵衛は取り立てて遣わそう」

と言った。すると美作守は老いた顔を息子の方に向けて、

「信長公に騙されるなよ」

と、きつとした口調で言った。

「おいほれめ！ 無駄口をきくな」

信長は声を出して笑い、その笑いをとめると、

「二人の首を刎ねろ」

と傍の者に命じた。

お市の方と三人の姫が清洲城に送られ、織田上野助信包に預けられてから程なく、小谷落城に先立って敦賀に匿されていた長政の嫡子萬福丸が捕えられた。信長は藤吉郎

に命じてこれを斬らしめた。萬福丸は十歳だったが、信長は容赦しなかった。当年一歳の末子幾丸は、これも落城に先立って長沢村福田寺に匿されたが、信長はこの方は詮議しなかった。

天正二年元旦、信長は小谷城攻撃の時望んだように、朝倉義景、浅井長政父子の三つの首級を酒宴の席に置いて酒を酌んだ。

小谷城落城の時、お市の方は二十七歳、長女茶々は七歳、次女のおはつは五歳、三女の小督は三歳であった。お市の方は長政に嫁いでその年に萬福丸を産み、二年おいてから隔年に、茶々、おはつ、小督、そして末子の幾丸を産んだ。幾丸は落城の年の五月に生れたので、お市の方は幾丸を産んで三カ月して浅井家滅亡の悲運に遭ったわけであった。

茶々はとういうものか小谷城から輿に乗って運び出された時のことを、はっきり記憶していなかった。すべては真暗い深夜に起った出来事のような気がしていた。実際は早曉のことであったが、本丸の御殿の庭先の樹木がそれとわからぬ程辺りには暁闇が深く立てこめていたので、茶々にそうした錯覚を抱かせたのかも知れなかった。それに侍女と共に輿にはいつてしまうと、輿の垂れは降ろされたまま一度もあげられなかった。侍女は人が変わったようなきびしさで、垂れをめぐって外を見ることを固く禁じた。

茶々はめらめらと火焰の舌が襲いかかる中を、自分を乗せた輿は進んで行ったような気がする。実際には火など燃

えている場所を輿は通って行った筈はなかった。早曉の新戦場の腥い風こそ吹いておれ、そこらは一面に静かな稲田をなしていて、その中を道は北から南へ走っていた。

併し、茶々は小谷城からの脱出を火焰と結びつけて考える考え方からどうしても遁れることはできなかった。いつか小谷山の山巔で叡山の僧侶たちに依って探燈護摩が焚かれるのを見たことがあったが、その時臉に灼きついた薪の山の燃える不気味な焰の中を渡った僧侶たちの映像が、小谷城の落城と結びついて、茶々に自分もまたあのような火焰の中から遁れ出して来たといった思いを抱かせるのかも知れなかった。

いづれにせよ、茶々は自分が生れ、七歳までそこに育った城の落城を、そのようなものとして考えていた。不思議に父長政のことは思い出さなかった。黒糸織の鎧に金襴の袷袢を掛け、朱柄の長刀を攜んで、輿の傍まで見送ってくれた長政が、茶々の眼に映った最後の父の姿であったが、それは悲惨な彼の最期と結びつけて考えることはできなかった。あのただならぬ異様な輿の出発前後の光景の中で、父の姿だけが寧ろある華やかさを帯びた賑わしいものに見える。

茶々たちが清洲城に移ってから一カ月程して、どうして城を脱出したのか、長く久政に仕えた下人の一人が訪ねて来て、彼に依って長政の最期の模様詳しく伝えられた。その時母のお市の方は堪えかねてその場に泣き伏したが、

茶々はその話に少しも心を動かされなかつた。父長政も、この下人のように小谷城を脱出して、今もどこかに生きているに違いないと思つた。

お市の方はそれまで気が張っていたのか、一滴の涙も見せるようなことはなかつたが、下人の話を聞いた時から、ひどく涙もろくなり、少しのことで目を曇らせるようになった。そんな母の姿を見ると茶々は不機嫌になり、自分で承知の上むずかつて侍女たちを梃摺らせた。

茶々の兄、萬福丸の敦賀の隠れ家が発見され、木下藤吉郎の部下の手で殺された上申差しにして道にさらされたという噂が耳にはいったのは、長政の最期の模様を聞いてから更に半カ月程してからで、庭を掃除に来た下僕の口からであつた。この時は、お市の方は血の気を喪つた顔で、すぐ仏壇に燈明を上げ、線香を立て、それから床に就いて、何日か床から離れなかつた。そしてその間お市の方は三人の幼い娘たちを自分の傍から離さなかつた。兄信長の手で、いつ三人の娘たちが奪われぬでもないと思つたからである。萬福丸の死も、茶々には実感をもつて感じられなかつた。茶々はそれを自分に關係のない他国の物語りのようなものとして聞いた。申差しにすることが茶々にはどのようなことが理解できなかつた。ただ、それを口にするのが、母の心を悲しみて引き裂くものであるということだけを知っていたので、彼女は決してその言葉を口からは出さなかつた。

嬰兒の幾丸の顔を見ることができないのが、茶々には一番淋しかつた。小川伝四郎と中島左近という武士が付き添つてどこかへ預けられたということだけは知っていたが、その預け先がどこであるかは知らなかつた。併し、この弟の名前もまた現在の自分たちには禁句であることを何となく弁えていた。

祖父久政については、茶々は小谷城に居る時から無関心だつた。久政は息子の長政と仲が悪かつたせいとか、茶々たちにも殆ど言葉らしい言葉はかけなかつた。それに住んでいる京極曲輪も本丸から離れていたのも、めつたに茶々は大人道のような老人と顔を合わせることはなかつた。顔を合わせるのは必ず何か浅井一族の者が一堂に集まる儀式とか行事のある時であつた。そんな時久政は長政より一廻り大きい鬘髻たる躰を一段と他より高い座に置いた。気難しい老人で、何事も自分が言い出したら諾かないことは、幼い茶々の眼にも判つた。祖父という肉親の親しさは感じられなかつたが、併し茶々はこの祖父を見ることは嫌ひではなかつた。何事に於ても、久政を立ててその言に逆らわぬ父の長政より、傲然と構えている偉丈夫の老人の方が豪い人間に見えた。大きな眼と折れ曲つた鼻、総体に鷹を思わせるようなその烈しい容貌は、茶々をまばたきもせず見詰めさせる何物かを持っていた。

ずっと後年になつてのことであるが、茶々は祖父久政のことを、あざやかに臉に思い描いたことがあつた。父長政

のことは、その死も、その合戦ぶりも、後にも先にも一度も想像したことはなかったが、久政の方は、その時初めてはつきりと彼女の眼に浮かんで来たのであった。

茶々が十九歳の時のことである。その頃彼女は安土城に住んで居たが、一日信州の行商人が城内に招び入れられたことがあった。その中に諏訪十と呼ぶ十二、三歳程の孤児の少年が混じていた。信州の生れで、合戦で両親を失ったということであつたので、侍女の一人がその事情を訊いてみると、少年は数年前の自分のおぼろげな記憶を物語つた。

——その時諏訪十は九歳だつた。村の子供と川遊びから帰つて来ると家は固く戸締りされてあつた。平生父母から家へ帰つて家が戸締りされてある場合は、城に何か大事が出来たと知つて、すぐ城へ来るようにと諭されてあつたので、彼は山裾の道を通つて城へと向かつた。城の近くになり、左右とも深田に挟まれた畔道はなみちを伝つて行くと、いつか彼は敵の陣地と城との中間に出ていた。そこを城へ向かつて走ろうとすると、鎧を着た武士が一人来て、諏訪十の濡髪をひつつかんでどこかへ引立てて行こうとした。すると横合から突然一人の武士が現われて、前の武士に斬りかかり、彼を追い払つてしまった。あとから来た武士は諏訪十の伯父だつた。

伯父は諏訪十を城の塀際まで連れて行くと、懸声もろとも彼の躰からだを塀の内側に投げ込んだ。諏訪十はもんどり打つ

て城内の塵塚に落ちて失神した。暫くして気がつくと、庭先に一人の白髪の大將が居て、大勢の武士たちを下知してゐるのが見えた。

諏訪十は急に尿意を催して塀に向かって前をまくつた。丁度その時城の外に潮の沸くように鬨の声が起り、城内に雨のように矢玉が降り注いで来た。矢の一本は諏訪十の前髪を削つて、城の柱に音立てて突き刺さつた。間もなく數十間にわたる長塀に大勢の敵兵がとりつき、懸声と共に塀を外部からゆらゆらと揺すぶり始めた。その時城の中から腹巻をした女が一人薙刀かみばなを持って飛び出して来て、諏訪十の横を走つて行くと見ると、塀際に近寄つて、塀にかかつてゐる敵兵の手を左右に薙ぎ払い始めた。

合戦が終つて、城外を見ると、田圃の上に討死した者の骸が無数に伏しており、いづれも首がなく、形は丁度箕かきに似ていた。稲田も畔道も血潮に濡れていたが、そのほかのことは、子供の諏訪十の心には不思議に何も残つていない。

ただそれから何日かしたある晩方、皆が討死の覚悟を決めて互いに手を取り合つて歎き悲しんでいるのを諏訪十は見たことがある。

諏訪十の話はこれだけだつた。どこの合戦かどこの落城か判らなかつた。その時傍に付いていた男の話では、天正十二年の大井郷の伴野城の落城の時のことらしいといふ話であつた。

これを聞いた時、茶々は少年の語った城中で下知していた白髪の大將というのが、祖父久政のような気がしてならなかった。そして薙刀を持って闘った女が、久政の側室で常に彼の傍を離れなかった気丈な女性ではないかという気がした。勿論諏訪十の話の中の城と小谷の京極曲輪ではその大きさは較べものにならなかつたが、茶々が小谷城の落城やその合戦の模様をある実感をもって眼に浮かべたのはこの時が初めてであつた。

合戦というものの持つ悲哀が、その規模の大小に拘らずあらゆる合戦に通じており、そしてまたそれが幼少の者の心を通して語られたという事で、茶々の心に滲み入つて来たのかも知れなかつた。

併し、いずれにせよ、このことはずっと後年のことであつて、小谷落城から日が浅い清洲城当時の茶々は違つていた。当時の茶々は、要するに落城というものを業火ごうかのようなものとして感ずる以外、それを自分と身近い人間と結びつけて考えることはできなかつた。久政の死も、長政の死も、そして萬福丸の申差しも、彼女にはそれぞれ一つの物語りであるに過ぎなかつた。

あわただしく天正元年という年は暮れた。翌二年の春に、お市の方は長浜の絵師を招んで、亡き長政の画像を描くことを依頼した。長政の一回忌にそれを間に合わせたい意圖いどうであつた。絵師は長政を見知つていなかつたので、最初お

市の方の説明する長政の容貌を下絵に描き、それをもとにして何回も訂正した。その絵師が下絵を持って来る度に、茶々も口を差し挟んで、眼許が違ふようだとか、口許の感じが似ていないようだとか、いろいろな意見を述べた。

絵師はよくも倦きもしないと思われる程何度も城に足を運んで来た。漸く似て来たと思うと、その次に持つて来た時には却つて似ないものになつていたりした。そんなことを繰り返しているうちに、茶々は子供心に父の肖像が、容易に父に似て来ない理由に感づいた。それは母と自分とが臉に描いている長政の映像が全く違つたものであるためであつた。母が絵師に要求するものは長政の平生見せていた温和な風貌であり、茶々の求めるものは彼の、時折機嫌の悪い時などに見せた気難しい表情であつた。

「茶々は黙つていらっしやい」

ある時、お市の方は言つた。

「茶々の言うようにすると、父様らしくなくなつて、だんだん祖父さまに似て参ります」

母にそう言われてから、茶々は絵師の下絵を見入るばかりで、自分の意見は口から出さなかつた。母の言う通り、自分の言うようにすると、父の肖像は祖父に似て来るようであつた。茶々は長政の持つているすべての表情の中で、浅井家滅亡の責任者と言われる久政の強氣な烈しい面輪おもてに通じているところだけが好きであつた。

「祖父様が朝倉へお義理立てさえなさらなかつたら」

茶々はそんな言葉で、母から浅井家滅亡の原因を聞かされていた。それは併しお市の方の意見ばかりではなく、茶々はすべての侍女たちが、やはり同じように言うのを聞いていた。幼い茶々には詳しい事情は判らなかつたが、そんなことは別にして、好き嫌いで言えば、彼女は祖父久政の持っている性格の方が好きだつた。

長政の肖像は夏の初めに出来上がつて、お市の方のところに届けられて来た。長政は黒い烏帽子を冠り、同じ黒い素襦の衣裳を着けて、正面を向いて坐つていた。切れ長の眼は多少下がりが気味で、口許は小さく、鼻下と頬に少量の髯を貯え、肉付はあくまで豊かであつた。そこには剛毅瀟灑な一人の武將が描かれてあつた。

「まあ、御立派ですこと」

お市の方は三人の娘たちにそれを見入らせながら言つた。そこに描かれているのは、確かに長政であつた。茶々も久しぶりで父に会うような暖かい気持を感じたが、長く見詰めてゐるうちに、ある物足りなさを覚えた。茶々の眼にふと伯父信長の顔が浮かんで来た。茶々たちが清洲城へ来てから、信長は一度だけ城へやつて来た。その時四人の母は信長の前に伺候したが、茶々はその時、信長が何か母に二言三言慰めの言葉をかけるのを聞いた。

母と三人の女兒はすぐ信長の前から退出したが、茶々はその時初めて見た信長の面貌を決して忘れなかつた。細面の整つた顔の中で鋭い小さい眼と、大きい鼻と、緊まつた

口許と、尖つた顎が強く印象づけられた。それは久政よりも長政よりも強い、そしてまた実際に強かつた武將の顔であつた。

茶々は父の顔が信長に較べると何か大切なものが欠けているのを感じないわけには行かなかつた。それが物足りなく、悲しく、憤ろしかつた。茶々はいつか自分で知らないうちに、母のお市の方とは少し違つた複雑な感情で、信長という残酷な仇敵の武將に對い立っているのであつた。併し、茶々自身が父よりも母よりも、そして他の誰よりも、この母方の伯父信長の面輪を受けついでいることを彼女は知つていなかった。

茶々が京極高次、高知、龍子の三人の姉弟に會つたのは天正二年の秋で、長政の一回忌が清洲城内の一室で営まれてから間もなくであつた。

長政の回忌は信長に対して憚りがあるわけで、そのことにお市の方は氣を使つていたが、どういふ話し合ひになつてゐるのか、信長からも、清洲城主の信包からも供物が送られて来た。併し、勿論法要は内輪にひそやかに行われた。浅井家の菩提寺からは、これも氣を使つてゐるものと見えて、若い僧侶が二人だけやつて来て読経して歸つて行つた。お互いに供養者については一言も触れぬ奇妙な法要であつた。

長政の法要があつてから四、五日して、京極家の幼い姉

弟が見えたという報らせがあった。お市の方はその時、縁近くに坐っていたが、京極という名を耳にすると、顔を上げて複雑な表情をした。

京極家の高次、高知、龍子の三人の姉弟は、長政の姉が京極家に嫁ぎ、京極高吉との間に産んだ子供たちで、お市の方にとっては、血は通っていないが甥であり姪であった。

併し、浅井家と京極家との関係は、単に姻戚関係にあるというより、もう少し複雑であった。京極氏は古くから近江の名家として知られ、室町幕府では四職の一として、山名、一色、赤松と並んだ家柄であったが、三人の姉弟の父である高吉の代に、長政がこれを追って、所領を奪い、彼に替ったのであった。そうした過去からすれば、浅井家は京極家にとっては憎んでも憎み切れない仇敵と言うべきであった。

実際、お市の方は義姉の子供である三人の京極家の遺児たちが、小谷からほど遠からぬ観音寺山の麓に館を作って、そこで零落した生活をしているとは聞いていたが、その後どうなっているか全く知らなかった。それが突然、浅井家の亡んだ今、清洲城へ自分を訪ねて来たのである。

「お通しするように」

お市の方は使いの者に言うのと、庭で遊んでいた三人の娘たちを招んで、彼女らの従兄姉たちがやって来ることを告げた。

茶々は京極という名前は何回も耳にしていた。京極家と浅井家の特殊な関係は知らなかったが、京極が自分たちと縁続きであり、今は亡んでしまった近江の名家であるということは知っていた。京極という名は茶々には特殊な響きを持っていた。誰に聞かされたわけでもなかったが、その古い名家の名には、それを耳にする度に、手の届かない遠く高い山を仰ぐような一種の憧憬と、畏敬の念と、そしてある哀れさの入り混じった複雑な気持が心を浸して来た。それはいかなる武将の苗字からも受けない特殊なものであった。

茶々は母の右手に坐り、おはつ、小督の二人は左手に互いに寄り添うようにして坐っていた。先に部屋にはいつて来たのは十二歳の高次であった。上半身を少し屈めるようにして、庭の方を左にして一番奥の座を取ると、袴の折目を正し、そこへびたりと坐った。蒼白い皮膚を持った美貌の瘦せた少年であった。背が高いのと挙措動作が大人びているためとで、到底十二歳には見えなかった。続いて十三歳の龍子が五歳の高知を先に立てて、それをかばうようにしてはいって来た。

茶々は自分より年長の龍子が、部屋へはいって来て座へ着くまで、じつと眼を離さないで見守っていた。高次と同じような華奢な躰を持った背の高い娘であった。三人の姉弟はそこへ坐ると、いかにも前から申し合わせてでもあったように、揃って前へ手をついた。